

文化財デジタル画像形成に関する調査研究 (①企05-13-3/5)

目 的

脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財を間近で精査・鑑賞する機会は限定されている。そこで文化財の高精細な画像や特殊撮影画像を公開し、多目的な利用に供することは、文化財への理解を深め、実物の保存と共に活用の道を開く有効な方法である。本調査研究では、着色仏画・彩色壁画・油彩画・日本画などを対象とし、文化財研究に資するデジタル画像の形成方法、および、その応用のための手法（表示・出力）を開発し、広範な活用の方向性を研究することを目的とする。

成 果

1. 文化財の調査・撮影など

(1) 平等院所蔵「日想観」（近赤外線撮影、蛍光撮影、カラー撮影（13.10.15-17））

この他所内外からの依頼を受け、修復文化財、黒田清輝筆「グレーの原」、日本銀行貴賓室内ビロード友禅などの光学調査を実施した。

2. 他機関との共同調査

(1) 宮内庁三の丸尚蔵館（「春日権現験記絵巻」第8巻・第13巻の可視光線マルチショット及び6ショット撮影・透過赤外線撮影による調査（13.7.31-8.2））

(2) 奈良国立博物館（當麻寺所蔵「當麻裏板曼荼羅」の可視光線6ショット分割撮影・部分拡大撮影、赤外線分割撮影、蛍光写真分割撮影による調査（13.5.27-30））

(3) 奈良国立博物館（大徳寺伝来 重文「五百羅漢図」の可視光線全図・分割撮影による調査（13.7.2-3））

3. 成果の公表

これまでの調査研究成果のうち、佐野市立吉澤記念美術館所蔵 伊藤若冲筆「菜蟲譜」、鳳凰堂屏絵「日想観」について本年度に報告書（保存修復科学センターのプロジェクト「文化財の材質及び劣化調査法に関する研究」参照）刊行に協力したほか、昨年度調査を実施した萬鉄五郎「自画像」について、萬鉄五郎記念美術館「萬鉄五郎七変化」展図録『わが内なる自画像 萬鉄五郎 七変化』及びパネル展示で成果の一部を公開した。

4. 研究および開発

昨年度開始した、退色して判読不能となったいわゆる青焼コピーに対する撮影による簡便な復元手法の研究および開発を今年度も引き続き行った。

発表

- ・江村知子「人物の細部表現から見た「群れとしてのかたち」」第37回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「かたち」再考—開かれた語りのために—セッション1 趣旨説明 東京文化財研究所 14.1.10

研究組織

- 小林公治、田中淳、山梨絵美子、塩谷純、津田徹英、二神葉子、綿田稔、小林達朗、皿井舞、城野誠治（以上、企画情報部）、江村知子（文化遺産国際協力センター）、早川泰弘（保存修復科学センター）